

まず、懸濁態粒子について粒径スペクトル特性の類型化の試み等を行ってきているグループからの発表で、河口汽水域における高濃度濁度域を、塩分、濁度といった単純化指標で見ると、懸濁態粒子の組成や濃度をより正確に把握する上で、粒径分布や *Chl. a* 濃度でデータを補完することが有効であるとする報告があった。

2番目の発表は、東京湾における海水の季節変化や状況(海水温、密度など)をシリカの4量体の溶解化学種2種の相対強度比(質量分析計による測定)によって表す手法に関する報告で、適応例として、相模湾の海水との境界を表すと考えられる相対強度比の傾向変化の結果が紹介された。

3番目は、瀬戸内海および太平洋における PAHs の濃度レベルを、航海中の一定速度流入水から成分を吸着捕集する方法で区間ごとに評価、比較した発表であった。この時間空間加重平均値は、スポット値や時間加重平均値よりも領域間のレベル比較に適しているとし、この方法では瀬戸内海側において PAHs 濃度が高い傾向にあるという結果が得られていた。今後、手法を適応する対象と根拠、要因解析、濃度レベル自体やその差の解釈などが明確になると、より手法の利点が生かせる研究になると思われる。

最後に、防汚剤としての TBT の除去にアオサを利用し、その取り込みと分解特性に関する発表があった。アオサの TBT 取り込みにより3日間で1オーダーの濃度減少が可能とされ、また TBT はアオサ表面あるいは体内で分解を受け、取り込まれた TBT の多くはアオサ体内に蓄積されることが示されていた。アオサによる浄化能ポテンシャル評価の次の段階として、実効性の面からは、導入域として想定されている高濃度 TBT 水域における堆積物からの回帰を未然に防ぐ(浚渫)問題なのか、生物による取り込み、分解、その後の回収(持ち出し)を検討する問題なのか、あるいは費用対効果の点から放置するのか、手法の適用を前提としない目的に立ち帰る視点が考慮されると、さらに有効な議論となると思われる。

(滋賀県立大学 肥田 嘉文)